

## 教員養成・教員研修場面におけるインクワイアリー・サークルの実践

### Trials of inquiry circles in preservice teacher training courses and professional development workshops

足 立 幸 子

Sachiko ADACHI

#### 1. 問題の所在

平成29年及び30年の小中及び高等学校学習指導要領改訂では、「資質・能力」の育成を目指し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進めることが求められている。国語科においても、読書や探究を基にした学習が必要となっている。一方で、GIGAスクール構想の前倒し実現によって、一人一台端末の時代が到来し、読むことの授業についても、単に教科書に教材として切り取られた短い文章を、教師の発問にしたがって順々に読んでいくということではない形が求められている。

本稿で取り上げるインクワイアリー・サークルは、このような時代の変化に適合する読書指導法であると考えている。そのために、足立(2021)はアメリカで生まれたインクワイアリー・サークルとは何かを示した上で、それがリテラチャー・サークルから派生し発展したものであることを明らかにした。本稿ではさらに進めて、インクワイアリー・サークルを我が国の小・中・高等学校の教育現場で読書指導法として使用できるようにするために、まず、教員養成・教員研修場面にこの方法を導入し、どのような利点や欠点があるか、運用にあたっては何に注意をする必要があるか、その実現可能性を見極めることを目的とする。

以下、令和3年6月から令和4年5月の1年の間に、各種の教員養成・教員研修の場面で筆者が行ったインクワイアリー・サークルの5つの実践について述べ、受講者の反応から何が分かったか、何が困難であったか、そのために次の実践ではどのような改善を施したかを含めて報告し、インクワイアリー・サークルの評価と関連させて考察する。

#### 2. インクワイアリー・サークルの概要

インクワイアリー・サークル (inquiry circles) は、アメリカのステファニー・ハーベイとハーベイ・ダニエルズによって提案されている探究活動をグループで行っていく方法である。足立(2021)が明らかにしているように、ダニエルズが提案したリテラチャー・サークル (literature circles) から発展したものである。リテラチャー・サークルでは、子どもが読みたい本を選んで同じ本を選んだ子どもでグループになるのに対し、インクワイアリー・サークルでは、子どもがグループで調べたいことを選んで決めて探究する。基本的には子ども主導であるが、教師は時にキー・レッスンを挟みながら、必要なサポートを行う。ここでは、インクワイアリー・サークルの段階、キー・レッスン、探究のタイプの3点について述べておく。

## (1) インクワイアリー・サークルの段階

インクワイアリー・サークルには、4つの段階(stage)がある。

第1段階 浸る…好奇心を持つ、背景知識を構築する、話題を見つける、不思議に思う

第2段階 調査する…疑問を発展させる、情報を探索する、答えを発見する

第3段階 合体させる…研究をさらに進める、情報を統合する、知識を組み合わせる

第4段階 公にする…学びを共有する、理解したことを演じる、行動を起こす

(Harvey & Daniels, 2015, pp. 199-120.)

これらはいずれもグループになってから行うものである。グループは、できれば異質の集団の方がよい。

表1 方略を指導するキー・レッスン

読	1 背景知識を活性化し構築すること 2 自分の声を聞くこと 3 画像について考え、不思議に思うこと 4 情報を得るために文章や絵を使用すること 5 シグナルとなる語・語句とそれらの目的 6 注釈をつけること：考えた足跡を残しておく 7 簡単な言葉に言い換えること：内容と考えた足跡の両方を残しておく 8 疑問を持ち情報について不思議に思うこと 9 立ち止まり考え情報に反応すること
解	10 ノートをとること：疑問を持ちながら読む 11 画像、特徴や語から推論を引き出すこと 12 意見と知らされた意見を区別すること 13 単純と複雑：それはどちらか？ 14 情報を統合すること：要点獲得のために読む
協	15 向き直って話すこと 16 ホーム・コートのアドバンテージ：親しみと支持を示す 17 パリのアクティブ・リスニング 18 グループの基本ルールを作ること 19 作業計画を作って用いること 20 効果的な小グループのディスカッションのスキルを練習すること 21 自分はどこに立つか？ 22 会話を書くこと
同	23 中間軌道修正：熟考と再計画 24 失礼だが同意できない：快く異議を示す 25 注意深く聞く聴衆になること
探	26 自分自身の探究過程のモデルを示すこと 27 研究を声に出して言うモデルを示すこと 28 不思議に思う壁／疑問ボードを挿入すること 29 研究ノートを作ること 30 多数のソースを使って探究すること 31 疑問と不思議に思うこと：小グループで情報と疑問の足跡を残す 32 デジタルの注意散漫を扱うこと 33 調査話題の選択：自由記述に焦点をあてる 34 多くの話題についての探究グループの形成 35 ソースをチェックすること
究	36 グループとして結果のまとめ：質問ウェブ作成 37 インタビューの実演と練習 38 インタビューのガイドラインを構築すること 39 ポスターと壁で学習を共有すること 40 公にし、行動を起こすための方法の共有

(Harvey & Daniels, 2015, p.vi より足立幸子, 2021 で作成したものを再掲)

## (2) キー・レッスン

インクワイアリー・サークルは基本的には、子ども主導で行っていく。しかし、教師がその探究の状況を見ながら、読解・協同・探究に関するキー・レッスンを行って子どもの活動をサポートすることができる。キー・レッスンは、リテラチャー・サークルのミニ・レッスン(Daniels & Steineke, 2004)と同様に、短めの時間で一斉指導の形をとる。表1は、足立(2021)に表1として示したものの再掲である。

## (3) 探究のタイプ

インクワイアリー・サークルには、4つの探究のタイプがある。探究の種類というよりは、インクワイアリー・サークルのねらいや大きさ(費やす時間)などによって分類できるということである。

- ・ミニ探究…短時間で小グループを作ってリアリティーのある疑問を調べるもの。
- ・カリキュラム探究…カリキュラムに位置づけられた計画的なもの。
- ・リテラチャー・サークル探究…リテラチャー・サークルの中で疑問を持ったことを調べるもの。
- ・オープン探究…上記以外で、カリキュラムに関わらず、子どもが好奇心を持ったり、不思議に思ったり感じたりしたことを調べるもの。

以上の3点については、基本的には以下に示すどの実践においても、教員養成の科目や教員研修の研究会を受講するどの学生・教員にも伝えている。以下、5つの実践について述べていく。

## 3. インクワイアリー・サークルの実践

### (1) 考察対象とするインクワイアリー・サークルの実践場面

本稿では、令和4年6月から令和4年5月までの1年間に扱った、次の場面におけるインクワイアリー・サークルの5つの実践を考察の対象とする。

#### 実践1 N大学教育学部 国語専門科目 「国語科教育学演習Ⅲ」(選択科目)

日 時：令和3年6月28日, 7月5日, 12日, 19日, 28日 14:40～16:10の中の約40分間

場 所：N大学教育学部講義室

受講者：N大学教育学部国語教育専修3・4年生16名, 5班編成(1班3～4名)

課 題：国語教育(国語科教育学, 国語学, 国文学, 漢文学, 書道)に関すること

方 法：6月28日に詳しく内容説明, 1回目にワークシートを用いて課題を考えさせた。ワークシートには、それぞれの学生が課題研究として行っていることに関連する話題を例示しておいた。以下毎回90分の授業中に30～45分間作業時間を確保した。

#### 実践2 T市・Y村教員研修 小学校教諭対象 学校図書館研修

日 時：令和3年8月5日 14:30～16:00

場 所：Y村立Y小学校学校図書館

受講者：T市及びY村立小学校に勤務する学校図書館の担当教員16名, 4班編成(各班4名)

課 題：小学校3・4・5・6年生の国語科か社会科の単元に必要な資料を探すこと

方 法：講演によってインクワイアリー・サークルの説明を聞いた後, 小学校の国語科及び社会科の単元(学年は班で指定)を1つ選び, 必要な図書資料を学校図書館から用意するという演習であった。

#### 実践3 S大学 学校図書館司書教諭講習 「学習指導と学校図書館」

日 時：令和3年8月8日, 9日, 10日の10:35～12:00 8月11日の13:00～16:00

場 所：S大学教育学部講義室

受講者：S大学周辺市町村の小・中・高等学校教員11名・S大学学生4名計15名, 5班編成(各班3名)

課 題：学校図書館に関係することかあるいはこの夏の講習でこの班のメンバーで学びたいこと

方 法：異なる背景の対象者で班編成をし, 学校図書館研修に関して学びたいことを自由に課題設定させた。4日目に「公にする」機会があることを知らせた上で, 各班のペースで探究させた。

実践4 S大学教育学部 学校図書館司書教諭科目「学校経営と学校図書館」

日 時：令和3年12月18日, 19日, 25日, 26日 13:00～16:30の中の60分～90分間

場 所：S大学教育学部講義室

受講者：S大学教育学部2・3・4年生計40名, 同じ学年・専修で10班編成(各班3～5名)

課 題：不思議に思うこと・調べたいこと

方 法：先にグループ編成をし, 課題については特に指示をしなかった。同質集団であったので, それぞれの集団にちなんだ課題を設定したようであった。2週間にわたる土日の集中講義であったが, 土曜日は大学附属図書館が開館しており, 資料や教科書などが閲覧できたこと, 大学キャンパスの道を隔てた向こう側に市立図書館があり使用できた。4日目は「公にする」の会(発表会)となった。

実践5 T市教員研修 第2回中学校国語担当者会議

日 時：令和4年5月20日 15:00～16:15

場 所：T市立K中学校会議室

受講者：T市立中学校に勤務する国語担当教諭及び研修会企画指導主事計7名, 3班編成(1班2～3名)

課 題：令和4年度の国語科教育に取り入れたいこと

方 法：インクワイアリー・サークルの説明の後, 班を編成し, 令和4年度の国語科教育に取り入れたことを自由に班で決めて調べさせた。研修にあたっては, 情報端末持参の指示をしておいた他, 過去2年の国語科教育関係の雑誌を用意しておき, 受講者が自由に見られるようにしておいた。

**(2) 実践の実際**

以下5つの実践について, 筆者がどのように実践を行い, 受講者からどのような反応があったかについて述べていく。

実践1 N大学教育学部 国語専門科目「国語科教育学演習Ⅲ」(選択科目)

この授業は隔年開講の授業である。以前は, 受講者は国語科教育学を中心に研究する学生(ゼミ生)だけであったが, 令和3年度から国語学・国文学・漢文学・書道などを特に専門として学習する国語教育専修の学生も受講することになった。前までは国語科教育の資料室兼演習室で行っていたが, 新型コロナウイルス感染症予防のため, 広い講義室で実施となった。このため, 調べる資料として, 教科書や国語科教育の雑誌棟を資料室兼演習室から講義室に運ばなくてはならなかった。

初めての実践のため, 学生はまずグループで自分たちが疑問に思うことを何か決める第1段階で戸惑うのではないかと考え, 疑問例を記したワークシートを用意した。また, 評価もどのように行ってよいか手探りであったため, 学生がワークシートにその回であったことを書き込めるようにした。しかし, このワークシートは, 結果として, いろいろな失敗を引き起こした。学生は, この中の課題を選ばなければならないと勘違いしたり, それぞれが自分にあった課題を選ばなければならないと考えたりしたようである。また, 結果的に5つの班のうち1つの班がその誤解が解けず, 最後までそれぞれの課題をそれぞれに探究し, グループでの交流がうまく行われなかった。さらに, ワークシートを記入させるのに, 時間がかかり過ぎてしまった。以上のことは大きな反省点となり, 実践2以降では, このようなワークシートは書かせないこととした。

キー・レッスンとしては2つのことを行った。1つは, どのような資料を調べれば, 疑問が解決するかという資料を示したことである。雑誌論文であるならば, CiNiiやJ-STAGEといったデータベースを活用すること, 小中学校の教科書や, 『教育科学国語教育』『実践国語教育』などの雑誌も課題によっては活用できること, 紙の新聞は検索することができないので何か調べる際には用いにくいことを述べた。2つ目は, 第4段階の「公にする」際に使える方法の提示である。発表の仕方には, 主に書き言葉を使ったものとしては, 『光村の国語調べて, まとめて, コミュニケーション3 めざせ! 編集長』から, 新聞, ポスター, パンフレット, 図鑑, 絵本, まんが, かみしばい, かるた, レポートなどができると述べた。また, 話し言葉を使ったものとして, 『光村の国語調べて, まとめて, コミュニケーション4 発表・討論チャンピオン』から, スピーチ, ショー・アンド・テル, プレゼンテーション, ポスター・セッション, ワークショップ, 劇, ペーパーサー

ト、読み聞かせ、ストーリー・テリング、ブックトーク、アニメーション、ディベート、パネル・ディスカッションができることを短時間で伝えた。このことが利用され、5つの班のうち1つの班は劇を用いての発表を行い、残りの4つの班はパワーポイントを用いた発表を行った。

課題は、国語教育に関することということだけ決めておいたが、概ね国語科教育学に関する課題を受講者は選んだ。「中学校の国語教科書に掲載されている近代文学作家」「小学生が読む絵本に魔法はどのくらい出てくるのか」「小中学校の国語教科書の文学教材における主人公の年齢」などがあつた。筆者はこのようなテーマの卒業論文を指導したことがある経験から、卒業研究ではより多くの先行研究を読むように指導したり、リサーチクエストをもっと鮮明するように助言したりしたくなつたが、数回のインクワイアリー・サークルでは、受講者が満足できる結果が得られればそれでよいと考え、そのような指導は行わなかつた。

全体として、「国語科教育学演習Ⅲ」の内容に位置付くもので、探究のタイプとしては「カリキュラム探究」になつたと言える。

### 実践2 T市・Y村教員研修 小学教諭対象 学校図書館研修

小学校教諭を対象とした研修会ではあつたが、小学生が同じような動きができるように、その予行演習あるいは教材研究のつもりで行ってほしいということで、研修会を始めた。

最初にインクワイアリー・サークルの概要を説明した後、班ごとに単元を決めてもらい、単元を充実させるための資料を探すという位置づけで、学校図書館から図書資料を探すという演習を行った。これは、1回1時間程度で行うことなので、探究のタイプとしては「ミニ探究」となる。

キー・レッスンとしては、2点のことを示した。探究の仕方が分かるように『先生と司書が選んだ調べるための本—小学校社会科で活用できる学校図書館コレクション—』から、小学校社会科の単元でどのような資料をどのように集めることができるかを例示した。また、小学生が何か調べる時にまずは百科事典から調べることになるので、百科事典の調べ方について『先生のための百科事典ノート』から小さなワークを行ってもらつた。

小学校3年生と4年生と6年生は国語の、5年生は社会科の単元が選択された。学校図書館という環境のおかげで、問題なく探究ができた。「公にする」の第4段階は、集めた資料について紹介する形になつた。

### 実践3 S大学 学校図書館司書教諭講習 「学習指導と学校図書館」

実践3は、学校図書館司書教諭講習である。学校図書館司書教諭としての資格を得るための講習なので、教員養成にあたる。テキストとして用いた『探究 学校図書館学学習指導と学校図書館』（全国学校図書館協議会刊）には「第V章 情報活用能力等の育成と評価（1） 課題の設定」「第VI章 情報活用能力等の育成と評価（2） 情報の収集」「第VII章 情報活用能力等の育成と評価（3） 整理・分析」「第VIII章 情報活用能力等の育成と評価（4） まとめと表現」という4つの章があり、これを演習的に行ってみる手法として、インクワイアリー・サークルを用いた。したがって探究のタイプとしては、「カリキュラム探究」である。

この講習は、1日に4コマ程度を4日間行うという形になっているが、インクワイアリー・サークルを1日間でやるよりも4日に分けて少しずつ行った方が、いろいろな方法を合体させて探究していくことを学ぶのにうまくいくと考え、1日に1コマずつ4日間行うという方法をとつた。しかし、4日目の「公にする」ところでは2コマを費やした。

受講者は、学生も一部含むが基本的には現職教員である。原則どおり、学生と教員が混じること、教員も異なる校種・専門の教員が混じるように班を編成した。

第2段階の「調査する」リソースとして、こちらは、小学校及び中学校の国語教科書（各1社）や百科事典1セットを持ち込んだが、有効な紙資料を持ち込むことは難しかった。一方で、ノートパソコン・iPadなど情報端末の持参を指定しておいた（一部は貸し出しも行った）。受講者は、それら教科書などを調べたり、情報端末でネット検索を行ったりしていた。また、自宅から講習に通っている場合には、自宅や勤務校にある資料を持ち込んでいる場合もあつた。しかし、それだけでなく、この実践3で面白かつたことは、受講者同士アンケートを行うという班が2つ現れたことである。1つの班は紙でもう1つの班はグーグルフォームを用いて行っていた。受講者自身が探究のリソースになり得るのだということに、受講者も筆者も気付いた

実践であった。

探究の疑問は、「子どもたちはなぜマイクラフトに熱中するのか?」「『絵本』はどう活用されている?」「小学校の教科書にはどのような動物が題材にされることが多いのか?」「国語で学んだプレゼンテーションの技術を他教科でどう生かせるか?」「小さいところに読み聞かせをしてもらった子どもは、してもらわない子どもとどのように違うのか。」であった。国語で学んだ技術を他教科で生かすという発想は、班編成を異なる背景を持つ受講者同士で行うことにしたため出てきたものである。読み聞かせの班は、最初は実践1で使用したワークシートにあった課題例を検討したが、その中でその班のある受講者が、自分の2人の子どもに同じように読み聞かせをしたつもりなのに、1人の子どもは読書好きに育ったが、もう1人は読書は好きにならなかったという疑問を持っており、そこから班員と話し合っただけでこのような疑問として作ったということであった。また、読み聞かせと学力の問題にも発展し、探究をしながら疑問が変化していったことも報告された。実践1や実践2と違って、第1段階の「浸る」を丁寧に行うことができたので、このようなそれぞれに面白い疑問が探究されたと考察する。

実践1と同様に、キー・レッスンとして、第4段階の「公にする」の仕方を『光村の国語調べて、まとめて、コミュニケーション3 めざせ!編集長』と『光村の国語調べて、まとめて、コミュニケーション4 発表・討論チャンピオン』から紹介した。実践3では、1つの班がディベートを用いた発表を行った。それも、特別支援教育を受けている生徒を理解するため、生徒が好きなマイクラフトというオンラインゲームを調べてみるという活動であったが、そのオンラインゲームを学校で使用してよいかどうかについて賛成派・反対派に分かれて主張し、その班以外の班の受講者がジャッジをするというものであった。ディベートにしたことで、オンラインゲームそのものの長所短所をよく調べることができ、教員としてオンラインゲームをどう見るかについても考えることもでき、単純にプレゼンテーションをするという発表会とは違った収穫の多いものとなった。他の班も発表の仕方は色々で、筆者が講習に実物提示装置やマーカーを持ち込んでいたので、紙にマーカーではっきり書いたものを実物提示装置で示しながら話す班、もっと大きい紙に書いてポスターセッション(ただし、ポスターを貼る場所は用意しなかったので、ポスターを複数の班員が持ち、別の班員がそれについて説明するという形)をとった班などがあった。一方で、やはりパワーポイントを用いたプレゼン形式の発表の班もあつたり、単にパワーポイントを示すだけでなく、ネット上のリソース(記事や論文)を見せながらその概要を説明する発表もあつたりして、多彩な「公にする」やり方が印象的な実践となった。ネット上のリソースをそのまま見せながら発表することは、十分な時間がとれないような場面でも応用可能であると考えられる。

#### 実践4 S大学教育学部 学校図書館司書教諭科目「学校経営と学校図書館」

実践4は、大学の授業で、12月の土日2週にわたる集中講義の形で行われた。40人と人数が多かったので、初めて同質の集団で班編成を行った。このことは、第1段階「浸る」で疑問を持つ時に大きく作用した。各班はこのクラス全体での自分の班の性質を理解した上で、探究する課題を立てる傾向があった。具体的には、現代教育コースの学生の班は「本の裏表紙や奥付に対象学年が示されているものがあるが、何を基準に対象学年が決められているのか?」という疑問を、音楽教育コースの学生の班は「小・中学校音楽科教科書鑑賞教材～作曲者の国名、時代、授業での扱われ方～」を調べるようになったし、国語教育コースの学生は「小中学校の国語の教材のうち、物語・評論・詩に登場する食べ物はどうなのがあるか」を調べるようになった。図画工作・美術教育コースの学生は同じ絵本でも「絵本の表紙絵にはどのような特徴や効果があるか」という疑問を、数学教育コースの学生の班は「算数嫌いのきっかけとそれぞれのアプローチ法」を、家庭科教育コースの学生の班は「結婚について」のメリット・デメリット、結婚観の変化の背景などをそれぞれ調べた上で発表した。一方、人数が少なく異なる専門で集まった学生の班は「クリスマスの秘密」など、実施時期に影響を受けた疑問の持ち方であった。

第2段階「調査する」で用いたリソースは、実に多様であった。S大学教育学部はキャンパスの中に附属図書館があり、それが土曜日は開館していた。また、キャンパス沿いの道をはさんだ隣に、公立図書館があった。これらに授業中、あるいは授業外の時間に調べに行くことができ、教科書や絵本が活用されていた。ネット上の情報も、政府系の調査資料のグラフや、画像、音楽のデータなど多様に活用されていた。

第3段階「合体させる」で印象に残ったことがある。実践1・実践3と第4段階「公にする」に向けて、第3段階「合体させる」の具体的な作業はMicrosoftのパワーポイント(PowerPoint)の作成であることが多いことに気付いてきたが、S大学の学生の中には、共同編集をするためにGoogleスライドを選択している班があった。筆者は、このところのICT活用において、共同編集の可能性の広がりを感じてきているところであるが、インクワイアリー・サークルと、共同作業を行うのに適したGoogle系のもの(Googleスライド、ドキュメント、スプレッドシートなど)との相性の良さを理解した瞬間であった。

第4段階「公にする」については、10の班すべてがGoogleスライドもしくはパワーポイントを用いて発表を行った。この「学校経営と学校図書館」では1日ごとに授業の振り返りを大学の学務情報システムに提出させていたこともあり、最終的にインクワイアリー・サークルの成果物提出として、GoogleスライドをPDFファイルに変換したものやパワーポイントなどが班ごとに提出された。以上のことから、これも「カリキュラム探究」と言える。

#### 実践5 T市教員研修 第2回中学校国語担当者会議

実践5のT市と実践2のT市は同じ市であるが、実践2は小学校教員、実践5は中学校教員で、受講者は重なっていない。筆者が勤務するN大学教育学部はT市と提携を行っており、T市が主催する教員研修(全8回ほど)のうち3回はN大学の教員が派遣される形で、教員研修での研究授業参観・授業協議会・講演(講義・演習)を担当する。実践5はT市の中学校の国語教員に対して行われている8回の研修会のうちの2回目で、N大学としても筆者としても令和4年度の参加は初めてである。研究授業については、会場校になった中学校の教員経験4年目の若手教員が、国語の文学的文章を読むことの授業を提案し、その授業の内容・方法について協議を行った。講演については筆者が担当するものであるが、前もって企画者のT市の指導主事から、①年度当初に当たり各学校が意識していくと良い内容、②筆者が以前話していたICTにかかわる内容、③T市が取り組む読解力に関連した内容などの候補が挙げられていた。筆者は、①②③のいずれにも合致するものとして、「令和4年度国語科教育に取り入れたいこと」という演題とし、取り入れるべきものを筆者が選んで講義するのではなく、インクワイアリー・サークルを通して受講者に何を取り入れるべきかあるいは取り入れないべきかを自由に調査してもらう演習にしようと考えた。

最初、パワーポイントでインクワイアリー・サークルの概要を伝え、上記実践1～4について短時間で触れた後、「ミニ探究」として班ごとに「令和4年度の国語科教育に取り入れたいこと」を選んであるいは決めて調査してもらうことにした。リソースとしては、筆者がN大学所蔵の『教育学国語教育』などの過去2年分の雑誌類や国語科教育の書籍数冊を持ち込み、また、受講者には情報端末を持参してもらった。

講演の段階で15分を使った。残り1時間のうち45分を「取り入れたいこと」を決め調べ統合する時間(第1～第3段階)とし、最後15分を公にする時間(第4段階)とすることにした。受講者は女性教諭3名、男性教諭4名(うち1名は指導主事)であった。座っていた席の近さから、中堅の女性教諭3名が1班、ベテランの男性教諭1名と中堅の男性教諭1名の計2名が2班、男性指導主事と研究授業を行った若手教諭1名が3班となった。以下、少し詳しく状況を報告する。

1班は、第1段階「浸る」では、直前に行われた授業協議会で話題になった語彙指導のことが引き続き関心事になったようで、「令和4年度の国語科教育に取り入れたこと」として語彙指導を候補とした。そこで、第2段階「調査する」では、国語科教育の雑誌の語彙指導の特集を見ている教諭と、端末でネット検索を行う教諭という風に作業を分担し、どのような語彙指導が提案されているかを見ていった。第3段階「合体させる」では、互いの検索・情報収集結果を班で報告しあい、これは取り入れられそうだとか、これは難しいとか、この話は雑誌に載っていた情報と同じことを意味しているなどと話し合っていた。短時間ということもあり、特に発表用に何かを作ることはなかった。第4段階「公にする」は3人が順序よく調査結果を報告していくという形をとった。

2班は、「話すこと・聞くこと」を調べるべき課題としたようだった。しかし、この班は、まず自分たちが「話すこと・聞くこと」の指導についてどのように考えてきたか、どのように行ってきたかの共有を重視していた。それは、どちらかというと中学校国語の現場ではあまり行ってこなかったということであった。その上で、雑誌の特集記事を見てみるということを行った。第4段階「公にする」では、このような調査に向かう姿勢

も含めて、結論としては、これからは「話すこと・聞くこと」の指導もしていかなければならないと思ったということであったが、単なる「話すこと・聞くこと」の指導技術的な情報収集ではなく、自分たちの実践を振り返りつつ雑誌記事を見つ話し合っているところが、「令和4年度の国語科教育に取り入れたいこと」という研修内容に合致しているように見えた。インクワイアリー・サークルが協同で行われていることの長所が引き出されている事例だと考える。

3班では、「読解力の向上」が「取り入れたいこと」として選ばれた。これも、若手教諭が先の研究授業及びその研究協議会を経て関心を持っていた話題で、指導主事の方もT市の読解力の向上を任務としている関係で関心を強くもっている話題であったようである。用意した雑誌や書籍なども少し読んでいたが、話し合いながらそれらを読んでいるという感じで、話し合いながらベテランの指導主事が若手の教諭にアドバイスをしているように見えるところもあった。最後の第4段階「公にする」は、指導主事は指導主事の立場でやっていきたいこと、若手教諭は若手教諭として授業を具体的にどのようにやっていきたいかについてを述べていた。

#### 4. 考察

以上、実践1から実践5までを時系列で、筆者自身が何をどのように考え実践し、受講者からどのような反応があったか、どのようなところに筆者が価値があると考えたかを述べてきた。そして実践5では、短時間の探究であったにも関わらず各班の様子を細かく報告したのは、このようなインクワイアリー・サークルが実践として有効に機能したかどうかは、結局のところインクワイアリー・サークルの「評価」がどのようなものであるかということにかかっているということに、筆者自身が気付いていったためである。

前稿である足立(2021)はインクワイアリー・サークルがどのようなものかを論じた論文であったが、インクワイアリー・サークルの発生の起源に焦点をあてたため、評価については取り上げていなかった。そこで、ここで改めてインクワイアリー・サークルの評価について述べたい。

ハーベイ&ダニエルズの初版『読解と協同：インクワイアリー・サークル活動中』(Harvey & Daniels, 2009)でも、改訂版『読解と協同：好奇心、取組、理解のためのインクワイアリー・サークル』(Harvey & Daniels, 2015)でもいずれも第12章が評価に関する章になっている。

表2に掲載したのは、改訂版に掲載されているループリックを引用者である筆者が翻訳したものである。初版にもほぼ同じものが載っている。すなわち、第1段階「浸る」・第2段階「調査する」・第3段階「合体させる」・第4段階「公にする」と段階ごとに、どのような観点で評価をしたらよいかが示され、1～4点のスコアで採点できるようになっている。このループリックは、各生徒に対して行われる評価であるが、このように評価して十分機能するインクワイアリー・サークルだったか、という目で上記の実践1～実践5を振り返ってみたい。

##### (1) 第1段階「浸る」についての考察

第1段階「浸る」については、実践1はまだやり方がよく分からず、うまくできなかった。バラバラなまま共通の疑問を探究するように修正できない班もあった。班ごとに思っていることを十分に話し合う時間が取れなかったことが失敗の原因であるが、疑問を出し合って共通の疑問にするような働きかけもなかった。調べながら疑問を立て直すような働きかけもできなかった。その点、実践2～5は、教員養成や研修の場面が文脈になり、うまく班ごとに疑問を絞り込んだり疑問を発展させたりすることができていた。実践2・実践5には45分後には「公にする」があること、実践3・4については、4日目に第4段階「公にする」があることを予め伝えていたために、スケジュールや目標をうまく決めることができていたようだ。

##### (2) 第2段階「調査する」についての考察

第2段階「調査する」については、リソースの紹介などを行った程度であったが、実践1～実践5のいずれも、比較的うまく行っていたようであった。しかし、これは今回の実践が、大学2年生からベテランの教員までという調査する能力を有している人たちであったためである。小中学生であれば、この段階を相当時間を割いて丁寧に指導する必要がある。



表2 インクワイアリー・サークルのルーブリック

名前: \_\_\_\_\_ 日付: \_\_\_\_\_ トピック: \_\_\_\_\_

インクワイアリー・サークル ルーブリック：第1段階 浸ること：好奇心を呼び起こし、背景を構築し、トピックを発見し、不思議に思うこと		
行うこと	証拠	スコア1-4*
<ul style="list-style-type: none"> <li>トピックを調べたり、学んだり、不思議に思ったりする際に様々なメディアでの相互交渉を行うこと</li> <li>手早く書き留めたり、質問を書いたり、つながりを見つけたり、リアクションをしたりするなどのテキストへの反応</li> <li>スケジュールを決めたり、基本ルールや目標を決めたりして、チームで生産的に作業をすること</li> </ul>		

\*4=際立って優れた, 3=素晴らしい, 2=よい, 1=まだ発達途上

インクワイアリー・サークル ルーブリック：第2段階 調査すること：質問を発展させ、情報を検索し、解答を発見すること		
行うこと	証拠	スコア1-4*
<ul style="list-style-type: none"> <li>情報を獲得するために聞き、話し、見、読むこと</li> <li>研究的な質問を発展させること、また、解答を発見するために読んで聞いて、見ること</li> <li>スケジュールを確認したり課題を完成させるためにチームで生産的に作業すること</li> </ul>		

\*4=際立って優れた, 3=素晴らしい, 2=よい, 1=まだ発達途上

インクワイアリー・サークル ルーブリック：第3段階 合体させること：研究を強化し、情報を統合し、知識を構築すること		
行うこと	証拠	スコア1-4*
<ul style="list-style-type: none"> <li>本、記事、ウェブサイト、ビデオ、図書館訪問を通して、より深い読書と研究に携わること</li> <li>ソースをチェックし信頼性を確認すること</li> <li>知識を構築するために情報を統合すること</li> <li>課題の完遂をモニターし計画を共有するためにチームで生産的に作業をすること</li> </ul>		

\*4=際立って優れた, 3=素晴らしい, 2=よい, 1=まだ発達途上

インクワイアリー・サークル ルーブリック：第4段階 公にすること：学習を共有し、理解を発表すること		
行うこと	証拠	スコア1-4*
<ul style="list-style-type: none"> <li>様々な方法（ポスター、モデルを示すこと、説得的な手紙、社説、雑誌、絵本、ビデオ、ブログなど）で、学んだことや理解したことを実演すること</li> <li>学習の過程を振り返り、有機的に関連づけること</li> <li>協同の過程を振り返り、有機的に関連づけること</li> <li>新しい学習に向けてアクションをとること</li> </ul>		

\*4=際立って優れた, 3=素晴らしい, 2=よい, 1=まだ発達途上

### (3) 第3段階「合体させる」についての考察

今回利用したリソースは、筆者が持ち込んだのは、小中学校国語教科書、国語科教育の雑誌、国語科教育の書籍、百科事典であった。受講者は情報端末を持参した。いずれも大変よく機能していた。また、学校図書館、附属図書館、公立図書館などの環境があるとさらにうまく行くということも明らかになった。図書館訪問は、Harvey & Daniels(2015)のループリックでは第3段階に位置づけられている。もしも小中高等学校などで、学校図書館、公立図書館などを利用するのであれば、その利用指導もキー・レッスンとして取り入れていく必要がある。実践2では、小学生と同じ行動をとるつもりで、学校図書館から資料を集めるという方法を用いた。このような活動は、小学生でも行えそうだという見通しが立ったが、さらなる研究が必要である。

筆者は、読解・協同・探究の3つのキー・レッスンのうち、協同のキー・レッスンは、実践1～実践5で行うことができなかった。それは教員養成学部の学生や教員が、高い協同の能力や技術を予め持ち合わせていたためである。おそらく、小中高等学校でのインクワイアリー・サークルを行っていくには、丁寧にこの協同のキー・レッスンを行っていく必要があるであろう。

### (4) 第4段階「公にする」についての考察

『光村の国語調べて、まとめて、コミュニケーション3 めざせ!編集長』『光村の国語調べて、まとめて、コミュニケーション4 発表・討論チャンピオン』のキー・レッスンのおかげで、実践1では劇、実践2では本の紹介(ブックトーク)、実践3ではディベート、ポスターセッション、実践4はスライド発表、実践5では口頭発表などの多彩な「公にする」の形が出てきたことは、本研究の成果と言えよう。特に実践3のディベートは、探究内容にあった「公にする」形であり、インクワイアリー・サークルという活動の魅力を知らしめるものとなった。実践4の第3段階の「スライドの協同編集」から第4段階「スライドによるプレゼンテーション」の流れは、今後の国語科教育及び様々な教育の場面でのモデルとなるであろう。実践5で期待することは、ミニ探究の中での発表は口頭発表であったが、発表内容が今年度の受講者の教育実践上の指針あるいは参考になるかもしれないということである。そうなれば、これはまさに「新しい学習に向けてアクションをとる」ということになっていくと考える。

## 5. まとめと今後の課題

以上、本稿では、教員養成・教員研修場面におけるインクワイアリー・サークルの試行的実践を報告し、インクワイアリー・サークルの読書指導法としての実践可能性について検討した。実践1～実践5の様々な場面でインクワイアリー・サークルは、軌道修正をはかりながら進め、概ね実現が可能であることが分かった。特に、評価のループリックに合わせて考察を行い、小中高等学校でのキー・レッスンの必要性などについても言及を行った。

次は実際に小中高等学校の教育現場で、この方法がどのように実施できるか、検討していきたい。

## 引用・参考文献

- 足立幸子(2004)「リテラチャー・サークル—アメリカの公立学校のディスカッション・グループによる読書指導方法—」『山形大学教育実践研究』13, 9-18.
- 足立幸子(2021)「インクワイアリー・サークル—リテラチャー・サークルからの発展を中心に—」『新潟大学教育学部研究紀要』人文・社会科学編, 14(1), 1-9.
- 赤木かん子(2012)『先生のための百科事典ノート』ポプラ社
- Daniels, H. (2002). *Literature circles: Voice and choice in book clubs & reading groups*. Portland, ME: Stenhouse.
- Daniels, H. & Steineke, N. (2004). *Mini-lessons for literature circles*. Portsmouth, NH: Heinemann.
- Harvey, S., & Daniels, H. (2009). *Comprehension & collaboration: Inquiry circles in action*. Portsmouth, NH: Heinemann.
- Harvey, S. & Daniels, H. (2015). *Comprehension & collaboration: Inquiry circles for curiosity, engagement, and understanding*. Portsmouth, NH: Heinemann.

- 幸田国広編(2020)『探究学習－授業実践史をふまえて－』溪水社
- 鎌田和宏・中山美由紀(2008)『先生と司書が選んだ調べるための本－小学校社会科で活用できる学校図書館コレクション－』少年写真新聞社
- 桑田てるみ(2016)『思考を深める探究学習－アクティブ・ラーニングの視点で活用する学校図書館－』全国学校図書館協議会
- 中川一史・高木まさき(2004)『光村の国語調べて、まとめて、コミュニケーション2 疑問調べ大作戦』光村教育図書
- 中川一史・高木まさき(2004)『光村の国語調べて、まとめて、コミュニケーション4 発表・討論チャンピオン』光村教育図書
- 高木まさき・中川一史(2004)『光村の国語調べて、まとめて、コミュニケーション3 めざせ！編集長』光村教育図書
- 田村学・廣瀬志保(2022)『高校生のための「探究」学習図鑑』学事出版